

雨告鳥

小田 淳一

ダマスカスからベイルートに陸路で入った日の夕刻に、調査の情報提供者である作家のD氏に会った。この町で一番素敵なカフェが近くにあるからそこに行こうと車で連れて行ってくれた所は、偶然にも二年前の冬に昼食をとった海辺のカフェだった。大学でも教鞭を執っているが本業はあくまでも作家であるD氏は泰然自若とした話し振りで四方山話を始め、会話の途中で時折訪れる長めの沈黙もまったく厭わない様子であった。しばらくしてから「お前の調査したいことはどうやら法律も絡んでいるようなので知り合いの弁護士を家に呼んであげるから一緒に何か食べながら話を聞くといい」と、自宅に招待してくれた。テイクアウトのシュワルマを買いに息子さんが出たすぐ後に若い弁護士が現れた。堂々とした体躯で素足に革靴を履いた彼は惚れ惚れするようなバリトンで、憲法における公用語規定の箇所を朗々と暗誦したかと思うと、女友達に携帯電話をかけてフランス語起源のアラビア語リストを時々大笑いしながら聞き出してくれ(つまり限定された場面での使用語彙である)、D氏はそれを面白そうにメモに取っていた。調査項目を埋めるということに関しては余り収穫はなかったが、所謂研究者とは根本的に異なる作家や弁護士の言語観は新鮮に映った。遅くなったので暇乞いをするのでD氏は翌日も昼飯に招待してくれた。帰国してからお礼のメールを送ったところ、ジュネーブで開催された国連会議「文明間の対話」で彼が行った講演の原稿が届いた。



Rachid El-Da 氏(ベイルートの自宅にて)。氏は10月に国際交流基金の招きで来日し各地で講演を行った。

講演は、彼が初めてニューヨークを訪れた時の体験から始まる。アメリカに移住して当地で亡くなった彼の叔父と、レバノン北部の故郷を一步も出ることなく亡くなった父の記憶とが重なり合い、異国の地で父に逢うことを予期するという一種異様な既視感を伴った、静謐で詩的な死のイメージは、彼がアメリカを故郷と錯覚することによって生じたものである。この挿話を通して彼は、西洋的近代性の本質とは、あらゆる「産床」をただ一つのものに変質せしめてしまう画一化に他ならないと断言する。従って、生まれた土地への郷愁(自らの諸起源への回帰願望)とはどのようなものであれ、同じ産床で生まれたことの拒絶につながり、この意味において原理主義は(宗教的であるか否かを問わず)「ある生地」への郷愁に基礎を置くものである。それにもかかわらず、西洋的近代性は不可避の選択であり、またそれと同時に困難で、暴力的な選択であり、さらには多くの血を流す選択である。「産まれること」にさえ介入するグローバリゼーションに触れてから、彼はその対極である「死」、そしてテロリズムについて語り始める。キリスト教徒のアラブ人家庭に生まれた彼は15年続いたレバノン内戦の最初から最後までを目撃した生き証人であり、自身も爆弾で瀕死の重傷を負っている。彼を扱った研究書によれば「ロジック」な恐怖を精神と身体に刷り込まれた彼は、「正当な理由」と称されるものに基づくテロリズムには「批判意識」のかけらもないと弾劾し、自分たちの権利と見なしているものを獲得するためには、血を流すのではない他の手段を考え出さなければならないと説く。彼は講演の最後で力を込めてこう繰り返す。「正当な理由に基づくなどというテロリズムから脱し、戦いで命を落とす人々に対話の必要性を認めさせなければならない」。

この講演はニューヨークで起った惨劇の前日である9月10日の午後に行われた。その時の聴衆は翌日彼の講演のことを思い出したであろうか。講演の原稿が添付されたメールの本文には、「またベイルートで会おう」とだけ記してあった。